

経営と健康

情報収集勝利への道

第一回

講談師 一龍斎貞花

本誌7月号「合成燃料」の項の最後に、

「新たな市場の需要に対応できるよう、
長期的な見通しとリアルタイムでの情報
収集が必要となりそうです」と書かれて
いる。新しい情報もどんどん収集されて
いる今日とはいえタイムリーな情報を得
ることが大切。

戦国時代も、的確な情報をつかんだ
者が勝利を得ている。

武田信玄言行録の言葉

「実力の差は、努力の差
実績の差は、責任感の差
人格の差は、苦勞の差
判断力の差は、情報の差」

判断力の求められるトップの成否は、
情報の差で決まると言う。

信玄は、修験者や富士御師、歩き巫女
など諸国を自由に歩く神職集団を情報

源として活用。これら透波を3人の武将
に10人ずつ預け、諸国へ潜伏させ情報収
集し、時には流言飛語によって相手を攪
乱戦法、これも情報の活用である。

領地甲州は山国、情報伝達の手段が
狼煙。国境で変事があればすぐに狼煙
を上げ、山また山なので次々と狼煙を打
ち上げ、本拠躑躅ヶ崎から一時・二時間
で緊急出動出来たという。当時としては
非常に早い危機管理体制が敷かれていた
のである。

敵を知り、己をれば百戦危うから
ず（孫子）

いざ戦いの場合、つかんでいる敵の情
報、敵の力、特徴を家来に公表。

〇〇という武将はこういう特徴があ
る。こうした戦法を得意にしている。気
性は、弱点は・・・と教える。

旗差し物を押し立てて攻めててくるの

で、その旗印を見てどういう対応をする
か、情報を知らされているので戦いやす
いわけ。

交渉相手が難攻不落の時、担当部署
以外の者も情報を集め、持ち寄って討議
し突破口を開くべきであろう。

味方には率先してディスクロージャー
（情報公開）の信玄です。

情報伝達者を一番手柄の信長

「ウワツ、信長軍が攻めて来た！」慌
てふためく今川軍、来るはずがないと

思った信長軍の来襲、一旦浮き足立った
ら、「静まれ」といっても冷静になるもの
ではない。織田信長の家来は義元の顔は
知らないが、輿に乗った立派な鎧兜を見
て、服部小平太が「義元殿見参！」と、
三間柄（5m40cm）の槍を突きつける。

足軽小者などそんな長い槍は使いこなせ
るものではないが、下手同士なら短い槍
より長い方が有利。狭い戦場なら柄は木
だから切つて短くすればいいと合理的な
考え。その槍が義元の脇腹にグサリと突
き刺さった。

「おのれ下郎！」義元太刀引き抜き小
平太の膝をザックと斬つたから、小平太
のつげに倒れる。義元二の太刀を振り降
るさんとした時、横合いから「毛利新
助！」義元深手を負っているため新助に

討ち取られ、42歳を二期として討ち死。

当時は、大将が首を討たれるのは珍し
い。先陣、二陣が破られると不利と見て
引き上げるから殺されることは少ない。
大将討ち死とあつて今川軍なだれを打つ
て本国へ逃げ帰る。

織田方の大勝利となったが、それまで
は大将の首を取った者が一番手柄だった

が、「戦うべし」と言つて敵の情報収集に当たり義元の動静を報せた梁田正綱が一番手柄。一番が乱戦の中義元に深手を負わせた服部。三番手柄がやつと首を取つた新助。

こうして信長は情報収集の重要性を知らしめたのです。

信長の首が無い、光秀大誤算

反逆し本能寺で信長を討つた明智光秀。だが肝心の信長の首が見当らない。首が無ければ討ち取つた証拠にならない。

本能寺の騒ぎを知るや、信長と懇意の阿弥陀寺の清玉上人、ただちに本能寺へ駆けつけ、寺の横の竹藪から入り込み、本能寺の僧侶に扮してお寺の大事な物を持ち出すふりをして遺体を阿弥陀寺に埋葬したという説があり。毎年信長忌が行われ、お墓があり信長が明智兵に弓を射た時使つた手袋、弓の後に使つた槍の穂先、嫡男信忠の木像などゆかりの品が公開されている。

戦っている毛利より先に信長死の情報をつかんだ豊臣秀吉は、ただちに毛利と和議を結び、傘下の武将達に、「上様

の仇討ちをしよう」と、手元にある金子を惜し気もなく分け与え、諸将達は、「どっちにいったら生き残れるか、勝つ方へつこう」更に秀吉は確信はないものの「信長公は生きておられるぞ」

光秀の方が頭はいいが、秀吉の方には仇討ちという大義名分があり金もくれる。秀吉の方がよきぞうだ。

片や光秀は、「細川忠興の妻はわしの娘（玉川ガラシャ）だから味方になってくれるだろう。高山右近も友人だから」と手紙だけ。細川藤孝・忠興父子は依頼を断わり、高山も拒絶。いずれも生き残りを考へてのこと。

秀吉は農民から米を高く買い上げ、さらに道普請をし、夜も走るから篝火を道々に焚き、炊き出しを頼み、兵達には「武器、鎧兜は船で尼ヶ崎へ運ぶから身軽で走れ」重い具足はなし道はよし夜も明るい、握り飯を食べながら走る。こうして4日半で尼ヶ崎へ。当時の行軍は1日5里といわれているが、秀吉は要所に武器・食糧倉を持ち、無いところは現地調達。こうして1日20里行軍させている。

街道に物見を出しておけばいいのに、頭のいい光秀、机の上で1日5里の行軍だからまだ来れないと計算。それがな

んと4日半で来ちゃった。

「エッ、もう来たのか!？」

敵より先に信長が討たれた情報をつかんだ秀吉が勝ち、秀吉軍の「中国路大引き返し」の情報をつかめなかった光秀の負け。机上の計算だけでは勝利はない。ゲリラ的戦法といい、道普請など土木工事熟知の勝利。若き日諸国を流浪した時に会得した知恵が結集して、天下取りへの道を突き進んだ秀吉。信玄の言う「人格の差は、苦勞の差」と言えましよう。

光秀が三日天下で終つたのは、信長の遺体を入手できなかったため、武将達が味方に付いてくれなかったからという見方もあります。

信長の首を持ち出した清玉上人は、敵の手に渡らぬよう火葬したという説もある。

秀吉は信長の後継者は自分だとアピールするため、清玉上人に阿弥陀寺にて信長の葬儀を行いたいと再三申し入れるも、秀吉の魂胆を見抜いている清玉上人は、「葬儀はすでに済ませている」と謝絶。流石は信長や正親町天皇が帰依したといわれる清玉上人です。

秀吉は致し方なく大徳寺で信長の葬儀を執行。秀吉は怒つて阿弥陀寺の所領を減らしたともいわれる。

一般に信長の遺体は不明とされているが、本能寺の変の時、信長の供をしていた原志摩守宗安が、本因坊日海上人の指示によつて信長の首を持ち出し富士山の麓、富士宮市芝川町西山本門寺の境内に葬つたといわれ、信長の首塚が建てられ、11月の第2土曜日に信長公黄葉まつりが行われています。

信長は切腹の時、「我が亡骸は、富士の裾野に葬れ」と遺言したという説もある。

阿弥陀寺で毎年6月2日に信長忌が催され、信長と信忠、兄信広の木像などゆかりの品々が公開され、本門寺では毎年黄葉まつりと、不明どころかにぎやかです。

結末は、信長死後の情報となつてしまいましたが、これも歴史の面白いところとお許し下さい。

戦国時代は情報収集に苦心したが、現在は、情報は向こうからやってくるほど押し寄せてくる。その中からいかに正しい情報をつかむか。

次回は、徳川家康はじめ情報集めの間者を逆手にとつた毛利元就などご紹介いたします。お楽しみに。